

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 4 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520426

研究課題名(和文)他動性のプロトタイプ理論と類型論的仮説に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文)A Theoretical and Experimental Study of Transitivity on the Prototype Theory and Typological Hypothesis

研究代表者

鄭 聖汝 (CHUNG, SUNG YEO)

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：60362638

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では他動性のプロトタイプ理論(普遍性)と類型論的仮説(スル型言語とナル型言語)の整合性の可否を検証するために、類型特徴の異なる8言語(英語、中国語、タイ語、マレー語、日本語、韓国語、ヒンディー語、テルグ語)を取り上げ、ビデオ映像(4パターン)とイラスト画像(14パターン)による実験調査を行った。前者の4言語はSVO語順、後者の4言語はSOV語順である。毎年2-3言語ずつ調査を行い、母語話者数約1000人へのぼるデータを集めることができた。得られたデータはローマ字化し、注釈と翻訳を付け、成果報告書(冊子体)にまとめて公開した(分量389ページ)。

研究成果の概要(英文)：In this study, to verify the consistency of the properties of transitivity prototype (universal) theory and typological hypothesis (Do-language and Become-language), I performed an investigation conducted with video images (4 patterns) and illustrated pictures (14 patterns). I chose 8 languages with differing typical characteristics (English, Chinese, Thai, Malaysian, Japanese, Korean, Hindi, and Telugu). The examined target 8 languages were broken into 4 SVO languages and 4 SOV languages. Every year 2-3 languages are examined individually and data from approximately 1,000 native speakers have successfully been collected. The data results of this experiment have been Romanized, translated with annotations, and released in Kaken Result Report (389pages).

研究分野：言語学

キーワード：他動性 プロトタイプ理論 類型論 実証的研究 スル型・ナル型 SVO言語 SOV言語

1. 研究開始当初の背景

(1) 理論的な面

「言語の構造(形式)と意味の対応関係の解明」を言語研究の最終的な目標とした場合、他動性(Transitivity)の研究はまさに言語研究の中心的課題であることは疑う余地がない。ところが、70年代後半から80年代の初頭にかけて、他動性に関する二つの異なる仮説が西洋と日本の研究でそれぞれ生まれている。その一つは、現在最も影響力のある Hopper & Thompson(1980)によって代表される他動性のプロトタイプ理論であり、もう一つは、主として日英語対照研究から生まれたスル型言語・ナル型言語(DO-language/BECOME-language)と知られている類型論的仮説である(池上1981ほか)。他動性のプロトタイプ理論によれば、他動性(自動詞・他動詞)の実現は言語を問わず同じ性質を示す、即ち普遍的なものとされる。例えば、参加者が2つ以上で意図性が高く対象に変化があるという意味要素(パラメーター)が与えられれば、どの言語でもその状況を他動詞文として実現し、そうでなければ自動詞文として実現する。

一方、類型論的仮説によれば、他動性の現れは言語によって異なる。スル型の表現(他動詞文)を好む言語(例えば、英語 I found it.)とナル型の表現(自動詞文)を好む言語(例えば、日本語「見つかった」)がある。つまり、同じ出来事(意味的条件が同一)でも言語によっては、動作主に注目するか出来事全体に注目するかという見方の相違があり、前者のように「人間中心」の見方をする言語では他動詞表現が好まれ、後者のように「状況中心」の見方をする言語では自動詞表現が好まれる。この対立は言語類型学的に極めて基本的特徴であり、その背後には表現法・発想法の相違があることが認められている。近年ではスル型視点・ナル型視点が提案され、更なる理論的發展を遂げている(影山1996)。

このように見ると、両者の間には一種の矛盾が含まれているように思われるが、このことを正面から取り上げ検証を試みた研究はない。しかしながらこれまで必ずしもこの矛盾に気づけなかったわけではない(ヤコブセン1989)。またプロトタイプ理論にも(部分的に)異議を唱えた研究もある(Tsunoda 1985ほか)。いずれにしても、この二つの他動性の仮説は「形式と意味の対応関係」を解明する上で極めて重要であり密接な関わりがあるにもかかわらず、両者はそれぞれ独立した形で研究が行われ、現在に至っている。つまり、他動性に関する二つの仮説の関係、とりわけ両者の間の整合性の可否を追究するまでには至っていないのが現状である。

(2) 実証的な面

本研究に先立つ実証的研究には、平成21年度から23年度科研費補助金基盤研究(C)課題番号21520400)の補助を受けて行われた、

「アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究」(鄭2012)がある。しかし、ここで研究対象としている「他動性」とは、他動性のプロトタイプ理論が提案する普遍性理論に基づく他動性のモデルであり、普遍性の仮説それ自体を疑うものではなかった。ところが、日本語・韓国語・マラーティー語(インド・アリア語族)の3言語を対象に、他動性のプロトタイプ理論に基づく実験調査を行ったところ、普遍性仮説が提案する予測と異なる意外な結果が得られたのである。

この実験の目的は、被実験者に意図的な出来事(例、ある人が意図的に直接手でコップの中の液体をこぼした場面)と非意図的な出来事(非意図的に手が触れてその結果液体がこぼれた場面)を与えた場合、3言語がそれぞれどのように言語化するかを調査することであった。実験は非言語的刺激によるビデオ映像を使っている。当初は、他動性のプロトタイプ理論が提案する仮説通り、どの言語でも意図的な出来事であれば他動詞表現(こぼす)が、非意図的な出来事であれば自動詞表現(こぼれる)が多く使用されると予測していた。ところが、特に結果状態に焦点を当てた刺激(映像)の場合は、日本語と韓国語では意図的な出来事においても自動詞表現が多く(日:85.2%、韓:76.0%)、他動詞表現は非常に少ない(日:3.7%、韓:16.0%)という発見があった。これに対して、マラーティー語は同じ状況でも他動詞表現が多く(58.6%)、プロトタイプ理論の予測に近い結果が現れた。非意図的な出来事の場合もマラーティー語は他動性のプロトタイプ理論に合致した結果(他動詞表現0%)が得られたのに対して、日本語や韓国語では合致しない結果(他動詞表現、日:35.7%、韓:53.8%)が得られたのである。

当時はこの実験結果が表わす意味がわからず、説明に苦心したが、類型論的仮説を導入すれば解決できる可能性があることに気づき、本研究を着想した。そこで、まず典型的なスル型言語である英語の状況を調べてみる必要性を感じ、南イリノイ大学でデモ実験を実施してみたところ、意図的な出来事においては英語もマラーティー語と同様の結果を示すことがわかり、本研究の発展の可能性が再確認された。

[文献]

鄭聖汝(2012)『平成21年度-23年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書:アジア諸言語における他動性と非規範的構文に関する記述的・理論的・実証的研究』、大阪大学、1-185。

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56: 251-299.

池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学:言語と認知の接点』大修館書店。

影山太郎 (1996) 『動詞意味論』 くらしお出版.

Tsunoda, Tasaku (1985) Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics* 21-2, 385-396.

ヤコブセン・ウェスリー・M. (1989) 「他動性とプロトタイプ論」 久野暁・柴谷方良 (編) 『日本語学の新展開』 231-248、くらしお出版.

2. 研究の目的

本研究は他動性に関する二つの仮説——他動性のプロトタイプ理論 (普遍性) と類型論的仮説 (スル型言語とナル型言語) ——の關係に焦点をあて、両者の整合性の可否を検証し、より包括的な言語類型論の枠組みを構築しようとするものである。

本研究が成功すれば、とりわけ二つの仮説の間の矛盾を解明することができる。またこの矛盾は、類型論的仮説は話者による事態把握の相違を基盤にするが、プロトタイプ理論は、そのような言語文化的側面を無視していることに加え、理論自体に循環論がある可能性に光を当てることができる (文が表わす他動性の意味から 10 のパラメータを取り出し、またその意味要素によって他動詞文が結びつく)。最終的には、他動性のプロトタイプ理論の欠陥 (不完全さ) を指摘し、それを補うためには類型論的仮説の導入が必要であることを、実証的なデータをもって提案できるようにする。

3. 研究の方法

本研究では心理学的な実験手法を用いた二種類の実験調査を行い、実際の発話資料を調査した。調査対象の言語は、他動性のふるまいに置いて異なる特徴を示すとされる、スル型言語の英語 (インド・ヨーロッパ語族) とナル型言語の日本語 (アルタイ語族?) の他に、類型特徴の異なるアジア諸語 (中国語 (シナ・チベット語族)、タイ語 (タイ・カダイ語族)、マレー語 (オーストロネシア語族)、韓国語 (アルタイ語族?)、ヒンディー語 (インド・ヨーロッパ語族)、テルグ語 (ドラヴィダ語族) の延べ 8 言語である。語順の類型では SVO 型が 4 言語 (英語、中国語、タイ語、マレー語)、SOV 型が 4 言語 (日本語、韓国語、ヒンディー語、テルグ語) である。これにより、分析の精度を上げ、より信頼性のある一般化を進め、理論面ばかりでなく、個別言語の類型記述に対する貢献も目指すことができる。

実験調査では言語フリーな中立的な調査が必要なため、言語的刺激を用いないビデオ映像による実験 (4 パターン) とイラスト画像による実験 (14 パターン) の二種類の調査

を実施した。映像実験は意図性の有無などプロトタイプ理論に基づく他動性の意味素性と言語表現との相関を調査するためにデザインされたものであり、他方のイラスト実験は全体-部分における視点の移動と存在・所有・消失・損失などの状態性を表す言語表現 (BE, HAVE, NOT HAVE など) との相関を調査するためにデザインされたものである。この二種類の調査によって、それぞれ与えられた状況 (世界) をどのように言語表現化するか コード化するか に関して、言語による一定のパターンが現れることが期待される。その結果が類型論的仮説を支持するか、プロトタイプ理論を支持するかは、本研究の主な関心事である。

4. 研究成果

実験調査は毎年 2-3 言語を目標に行い、集められたデータを分析し、理論構築を行った。まず、平成 24 年度 (初年度) は英語 (南イリノイ大学)、日本語 (大阪大学)、ヒンディー語 (EFL 大学)、テルグ語 (ハイデラバード大学、EFL 大学) の 4 言語の調査を行い、得られたデータはエクセルファイルに入力してデータベース化した。平成 25 年度は韓国語 (ソウル大学)、タイ語 (Dhurakij Pundit University)、中国語 (北京聯合大学) の 3 言語の調査を行い、同様にエクセルファイルへの入力とデータベース化を行った。平成 26 年度 (最終年度) はマレー語を調査し、同様の作業を行った。特にヒンディー語・テルグ語・タイ語はそれぞれの原語をローマ字化して入力したあと、注釈・翻訳作業も行った。中国語・マレー語は原語のまま入力し (マレー語は元々ローマ字使用)、注釈・翻訳作業を行っている。

実験参加者数は、英語母語話者 151 名、中国語母語話者 115 名、タイ語母語話者 109 名、マレー語母語話者 108 名、日本語母語話者 115 名、韓国語母語話者 100 名、ヒンディー語母語話者 120 名、テルグ語母語話者 110 名、延べ 928 名である。得られたデータ量は実験参加者数 928 名 × 18 パターン = 16704 件である。

以上のデータ資料は各言語母語話者および個別言語専門家の協力を得て、再度確認を行ったあと、科研成果報告書 (冊子体) にまとめて公開した (389 ページ)。

研究成果発表は、中国語・英語・日本語の場合を取り上げて海外の学会で発表した (中日対照言語学会、中国人民大学)。ここでの結論は、日本語はプロトタイプ理論に沿った結果が見られるが、英語と中国語は意図的であれ非意図的であれ、一貫して他動詞表現が優位 (有意差あり) であり、プロトタイプ理論に沿わない結果となった。

